

---

# 魔女狩りの弾丸

ガチムチアーキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔女狩りの弾丸

### 【Nコード】

N4190Y

### 【作者名】

ガチムチアーク

### 【あらすじ】

鹿目まどかが「すべての魔女を消し去る」願いを経て、魔法少女となる瞬間。

曉美ほむらは諦めず、時間逆行を図る。しかし、ほむらの戻る時間は一ヶ月程度。

それ以前の変化を戻すことはできない・・・。

時は移り、見滝原での出来事より4ヶ月前。

某所の街、魔女を狩ることを目的とする部隊【魔女狩り】より

【ワルプルギスの夜】の討伐作戦を目前にする、一人の青年から始まる。

## 事ノ最初：諦めない者達

暗雲の空、暴虐の限りを尽くす異形が一つ。

齒車に逆さ吊りの、白き女性の巨人。笑い声が響く。

形の碎けた街、少女が二人と獣が一匹。

桜の髪、赤いリボンに二房のそれを揺らして少女は言う。

「ごめんね、ほむらちゃん。わたし、見つけたの。叶えたい願い事が」

黒き髪、血と涙の混ざった顔で少女は聞く。

「だから・・・その為に、この命、使うね」

「やめてよッ！ それじゃあ私は、なんの為に・・・！」

桜の髪の少女は慈愛に、その手を取る。

「これまでずっと、ほむらちゃんに守られて、望まれて、今の自分があるんだと思う。そんなわたしが、やっと見つけた答えなの、だから・・・信じて」

黒き髪の少女は何も言わない。否、言えない。

桜の髪の少女は、獣、白き獣に向き直る。

「さあ、鹿目まどか。その魂を代償にして、君は何を願う？」

事務的な、白き獣。

桜の髪の少女は、深く呼吸を一つ。決意を、信念を、確かめるよう

に、噛み締めるように。

「すべての魔女を、生まれる前に消し去りたい。すべての宇宙、過去と未来……」

「ごめんなさい、まどか……。あなたの決意を踏みにじっても、私は……。諦めない……。！」

黒き髪の少女が言う。左の手の甲、アメジストの輝きを強くして。懺悔としての言葉、それは小さな声。

桜の髪の少女、振り返ろうと。だが、先に黒き髪の少女、その盾が歯車の音を発した。

――――

時は移り変わり、新たな年を迎えた某所。

自然とうまく調和した洋風の街、朽ちた様子もないが人の気配もないそれ。

その郊外の草原。

暗雲と強風の撫でるそこに、幾つも並ぶ軍用テント。

漆黒のアサルトスーツ、ボディアーマーを着込んだ男達が、談笑、作業、相談、警戒に、各々が動く。

その一角、木箱に座り乗り、自動小銃の手入れをする青年が一人。

光さえも吸い込みそうな、漆黒の髪と目。

東洋人に近い顔立ち。よく言えば無駄のない整った、悪く言えば仏頂面のそれ。

周囲の人間と同じ格好で、黙々と手入れを続ける。と、そこにかかる、陽気な声。

「よう、ケイン！ 相も変わらず、愛想ねえな」

外国人特有の金髪碧眼、そばかす顔の白人。

ケインは、愛想も不快もなく、答える。

「ジョンか、偵察は終わったのか？」

「おう、奴さん凄まじいぜ。なんせ、スーパーセルなんざ引き起こすからな」

「俺達の仕事は変わらない。魔女は、殺すだけだ」

言つて、ケインは小銃の銃床を掲げてみせた。

ヘッケラーアンドコッホ

H&K G3型のアサルトライフル。

その銃床には、エンブレム。魔女のトンがり帽子を貫くナイフの絵面。それが表すは【魔女狩り】。

ジョンは呆れに溜め息一つ。

「お前ね、ちよつとくらい気楽にいこうとか思わんかねえ？」

と、そこに別の声。

「いいじゃないか。戦場では、ケインのような考えが役に立つ」

声の主は黒人、筋骨隆々の大男。  
ケインが大男に尋ねる。

「ガレス、作戦会議はどうだ？」

「ああ、大体決まったよ」

答え、別の木箱に座り込む。

「今日、1200に作戦決行。内容はこうだ。市街地上空までおびき寄せ、爆撃を浴びせる。怯んで地上に逃げた所を、一斉射撃で仕留める電撃作戦だ」

ケインが関心に唸る。

「シンプルだが、効果的だな。だが、そこまでヤバい相手なのか？」

周囲、無数の軍用テントを見渡して続ける。

「ザッと見れば千近く、大隊レベルだ。【魔女狩り】の作戦に、これだけ大規模なものは見たことがない」

「何でも、最強最悪の魔女だそうだが。名前は確か・・・【ワルプルギスの夜】とか」

脅かすようにジョン。

だが、ケインは動じずに言う。

「仕事は仕事だ。最強最悪が、放棄する理由にはならない」

「かあゝ！ 真面目なことだ！」

わざとらしい嫌味にジョン。

ガレスが思いつきに言う。

「だったら、この作戦が終わったら、三人で飲みに行かないか？ いい酒を扱う店を知ってるんだ」

「お！ どうせならさあ、飲み比べようぜ！」

「なんだ、いつものことじゃないか」

指摘に、ケインは懷からタバコのようなものを取り出す。咥える。が、火は付けない。ココアシガレットだからだ。ジョンは口を尖らせた。

「んだよう、お前は行かないってのか？」

「いつもと同じさ。魔女を殺して、金を稼いで、その金を俺達は酒代に費やす」

「けっ！ 素直じゃねーの」

「はは。ま、ケインらしい物言いじゃないか」

ガレスの言った後、鳴り響く警報。

ケイン達だけでなく、他の連中も声を、手を、止める。その後に響く、指示の音声。

「- 現在、1105より、作戦範囲への客員配置を開始する。各部隊員は、速やかに・・・」

小銃を担ぎ、ケインが立ち上がる。

「そろそろだな・・・。俺達は歩兵部隊だから、市街地だな」

「ケイン、精々俺の手柄のために頑張っておくれ」

「軍隊格闘で、俺に連敗しかしてない口で何を」

「うっせえ、俺は本番に強いんだよ」

軽口のやり取り。頼もしげに、ジョンが真っ先に駆け出す。

「さて、俺も爆撃機を温めておくかな。ケイン、爆撃後は任せたぞ」

「出来る限りのことはする」

「ああ、頼りにしておく」

ガレスも、力強く歩き去る。

慌ただしく動く人達の中、ケインは啜えたココアシガレットを少し噛み砕き、小銃の安全装置だけを確認する。

「・・・よし、行くか」

飾り気なく、不安も血気も宿さず、仏頂面で歩き出した。

――――――――――

避難を終えた、人気のない市街地。

ケインやジョン、他の兵隊が、ビルや建設物の窓近くに構える。と、左耳だけのイヤホンからノイズが響く。

ケインだけではない、兵隊全員。それは聞き知った「魔女の到来」。ノイズが収まった後、響く指揮官の音声。

「- 気を付けろ！ <sup>マジカ</sup> 魔女の結界に入ったぞ！」

ケインの小銃を握る手に、力がこもる。

と、魔女の姿がケインの、兵隊の目にうつる。

空に映える巨大な歯車、逆さに立つ青いドレスに白い肌の貴婦人。

「うおお・・・こりゃ、すげえ」

隣のジョンが呟く後、響く爆撃の音。

数機の爆撃機が、幾度と無く繰り返し爆撃。

魔女の笑い声が止むことはない。だが、爆撃を煩わしいと、市街地の大通りを地面にして、高い建設物を弾避けに、と。同時に響く指示の音声。

「- 歩兵部隊、攻撃開始！」

イヤホンからのそれ。ケインが、ジョンが、兵隊が、各々銃器を放つ。建設物の屋上や窓からのそれ。

小銃、機関銃、ロケット弾、対戦車砲、すべての銃撃が魔女の体に集う。

巻き上げた砂塵が魔女の体を覆う。と、指示一つ。

「- 撃ち方止め！」

猛威をふるう銃弾の嵐が止む。

緊張の中、ジョンが陽気に言った。

「YES！ こりゃ、勝ったぜ！」

「ジョン、無駄口は・・・」

言って振り向こうとケイン。その前に、風圧。ジョンの方角から撫でる、破壊力の副産物。

ジョンのいた場所、そこには何もなかった。彼のいた形跡はおるか、足場に使っていたビルの内部でさえ。

まるで人間大レーザーに削り取られた直線のそれ。そして、宙を舞う砂塵から現るは、無傷の魔女。

ケインは直感で理解する。ジョンを消し飛ばしたのは魔女だと。

一瞬の損失感を押しつけ、ジョンのそれに呆気に取られている兵隊に、ケインの喝。

「魔女だ！ 奴は生きている！ 警戒を怠るな！」

声に、兵隊はすぐに我を戻し、攻撃前と同じに物陰へと息をひそめる。

だが、指示は来ない。響くのは、魔女の笑い声なBGM。

腕時計型の通信機から、ケインが呼びかける。

「魔女はまだ生きています！ 再度、攻撃命令を！」

返事が返るはずのイヤホンは、ノイズの嵐。それは、魔女の結界に入る時の騒音とは違う。

不安定な、受信機が機能していないそれ。

ケイン同様に、指示を仰ぐ何人か。ケイン自身は、ガラスのない窓から魔女を見る。

最初に覚えた感想。それは悪夢だった。

作戦指示を受け、他の部隊が待機しているはずの建設物、ビルのそれ、だが無いのだ。あるはずの建設物が跡形もなく存在していない。その理由が分かった。今丁度、魔女が部隊の待機しているビルに狙いを定めていた。

何人かの銃撃による抵抗、魔女はびくともせず。

魔女の表す魔方陣、無数のそれ。放つのは、暗い虹色、破壊の光。一つではない、十でも足りない数。一瞬で、文字通り、ビルを消し飛ばした。

ケインの頭が追いつく、残りは自分のビルだけだと。

「く、そ．．．！ 作戦は失敗だ！ 各員、自己判断で撤退しろ！」

苦渋に、ケインが言い放つ。

すぐに兵隊の統率は崩れた。我先に逃げ惑う空気に、ただ一人。

ケインは逃げずに、魔女を睨む。そして駆ける先、それはビルの屋上だった。

攻撃部隊のいた屋上、対戦車砲を見つけては、真っ先に放つ。狙いの先には魔女。

弾は当たる、爆風を証拠に。だが、魔女は空でよろけるだけ、傷は負わない。

だが、ケインは攻撃を変えるだけ、弾の切れた砲から弾の入った砲へと。

煩わしく思ったか、魔女は敵意を持ってケインを振り向く。

そして展開する、無数の魔方陣。を、ケインは合図のように走りだす。

向かう先は、隣接する隣のビル。魔方陣が破壊の光を撃ち尽くす。同時にケインが隣のビルに飛び移る。先程まで足を支えたビルは、破壊の光に簡単に屈する。

「ちっ、何て奴だ．．．！」

悪態のまま、小銃を魔女に撃つ。

だが、対戦車砲でさえビクともしない体。小銃などでは豆鉄砲か、最悪、撫でる風にも等しい。

撃つては隣のビルに、魔女がビルを破壊する。その繰り返し、だが

長くは続かない。

逃げる先のビルが無くなった。ケインは悪あがきとばかりに、抜き放つ回転拳銃、スミスアンドウエッソンS & WのM 6 8 6、グリップの【魔女狩り】のエンブレムが映える。

魔女に向けて撃つ、が、当然に長くは持たない。

しかし、ケインは抵抗をやめない。戦う意志を折らない。

と、そこに飛来する二機の爆撃機。否、一機は既に両翼をもがれ、ケインのビルに墜落する。

だが、もう一機は、魔女と機関銃で果敢に戦う。

考えるよりも先に、ケインは動いた。

火の手が上がる爆撃機の内部、兵の死体に目もくれずに操縦席へ。通信機から、現在飛行中の爆撃機へ連絡。呼びかける。

「もう、歩兵部隊は全滅した！ 作戦は失敗だ！ 撤退しろ！」

しばらくはノイズ。だが、はっきりと返信が届く。

「- さすがだな、ケイン。あの猛攻に、よく耐え切っている」

聞き覚えの声。ケインは必死に答える。

「お前、ガレスか！？ 速く逃げろ！ ジョンも死んだ！」

「- ケイン。君は、動けるか？」

通信機から、弱い声。

ケインは静かに答える。

「ああ、致命傷はない」

「- そうか・・・こちらの、映像を、送ろう」

通信機の備え付け、スクリーンに写ったのは、血の海。すぐに気付く、それはガレスの血だと。

当のガレスは、その腹を貫くパイプの先端。驚くケインに、ガレスが笑ってみせた。

「- はは。実は、飛ぶのもやっとの、機体なんだ。・・・俺は、長くない・・・これから、魔女に特攻を、かける・・・！」

「ガレス！ 俺が魔女を引き付ける！ お前は撤退しろ！」

「-・・・いや、撤退、するのは、君、だ」

徐々に声の力をなくすガレス。  
ケインは焦りに駆られ、叫ぶ。

「馬鹿な！ お前の体こそ重症だろう！？ 撤退ならお前こそ・・・」

「- ケイン＝ラングロッド！」

瀕死とは思えない声。

フルネームで呼ばれ、思わず押し黙る。

「- 俺は、長くない、と言った。撤退して、死んでも、変わら、ない・・・。だが、ケイン・・・お前なら、逃げ、切れる」

ガレスは苦悶の表情を、満面の笑みに変える。  
戦友に向ける、それ。

「- 頼、む・・・ケイン、俺の覚、悟、を、汲ん、でくれ」

言葉に、拳を握り締める。

ケインの顔は仏頂面、しかし、決意を込めて。

「・・・分かった、撤退する」

「ふっ、ありが、とう」

通信が、映像が、途絶える。

燃え盛る爆撃機を出た先、魔女の存在する空。

まだ飛行を続ける爆撃機が、魔女に体当たりをしかけていた。

「・・・っ！」

感情を食いしばって抑える。

ケインは駆け出した。ビルにいては、魔女の目標にしかない。

ビルを降り切った後、空が燃えていた。

爆撃機の炎、魔女は直に浴びる。

だが、止まらない。人間を無力と、自らを頂点と、主張するように響く笑い声。

「こ、の・・・！」

苦渋に、拳銃を向ける。

が、撃つ前に脳裏をよぎった、戦友の姿。

ジョンの最後は、魔女の力に及ばない証明。

ガレスの最後は、生き残った事実を無為に捨てない戒め。

銃を下ろし、魔女を睨み、ケインは呟く。

仏頂面。それは、今の感情を抑えるための仮面。

だからこそ、ケインは呟く。

せめて、この事実は忘れずにと。

「ワルプルギスの夜。お前は、いつか殺してやるさ」

――――

目が覚める、そこは飛行機の機内。

ケインの服は、トレンチコートにワイシャツとジーンズ。ラフなそれは、先の光景を夢と物語る。

飛行機のエンジン音を、目覚ましがわりにする。

「夢、か」

いつしか、機内の席で寝ていた。と気付く。

と、そこに機内アナウンスが。

「 - 本機は、このまま着陸態勢に・・・」

窓の外は、夕焼けだった。

ケインは仏頂面のままに呟く。

「時間は、ちょうどいいか」

――――

某所の夜の街、きらびやかな大通りを外れ、ケインは裏路地へと。

細い路地、背負ったライフルケースを引っ掛けないように歩く。

入り組んだ路地に従い、歩き進む。

と、曲がり角、背後の角から男達が現る。

ケインの前を一人、後ろに二人、いずれもチンピラの若者だ。

前の男が、撫で声で言う。

「いよう、兄ちゃん。金貸してくれよ、友達だろ？」

ケインは無言でチンピラを一瞥。そして、無視して前を通り抜けよう。

「デメエ、シカトか！」

チンピラが掴み掛かろうと。

よりも速く、ケインの手が動く。

チンピラの伸びた手を、簡単に捻り折る。

パキン！ と、響く綺麗な音。

しかし、音源のチンピラは汚い悲鳴。

「う、ぎああああ！」

ケインは気にも留めず立ち去ろうとする。が、今度は背後のチンピラ二人が殴りかかる。

「この野郎ッ！」「ぶっ殺してやる！」

口汚いそれ、ケインは振り向かず。

チンピラが振り下ろす鉄パイプ。よりも速く、ライフルケースを背後に突き出す。

それは、チンピラの顎を打ち付け、鉄パイプを止める。

そのまま振り返りに回し蹴り、もう一人のチンピラを蹴り倒す。

ケインは表情を変えずに、初めてチンピラに言葉を発する。

「この辺りに【何でも屋】があるはずだ。何処だ？」

「舐めやがって・・・！」

蹴り倒したチンピラが、懷に手をやる。

が、ケインの抜き放つ回転拳銃が、チンピラの手を止めた。  
凍る、チンピラ達の空気。

ケインはやはり仏頂面。

「ナイフを抜けば、殺し合いと受け取る」

「は、はは、ど、どうせオモチャだ・・・」

ダンッ！ と、銃声がチンピラの言葉を遮った。

チンピラの足元には、弾痕の跡。それが、本物と物語る。

ケインは尚も仏頂面。

「【何でも屋】は、何処だ？」

「あ、あ、あっちの角曲がってすぐだ！」

ケインは無言。追及の代わりに銃口を、言ったチンピラに突き付ける。

恐怖に引きつる顔で必死に訴える。

「ほ、ホントだ！ 嘘じゃねえ！」

数秒の後。ケインが銃口を下ろし、チンピラの腹を蹴り飛ばす。

「失せろ」

短く言う。

『ひ、ひいいい！』

それを皮切りに、チンピラ達が走って立ち去った。

溜め息に、銃を懷に。

チンピラの言葉通りに路地を曲がる。

その先、扉が一つ。

鉄製、倉庫を思わせるそれ。何かしらの【屋】をやってるようには見えない。

ケインが躊躇い無く開けた扉、先には古い電化のジャンク、金属のガラクタが並ぶ。

無理やり持ち込んだかのようなカウンター。向こう側に座った白髪の老人が、レンズで石ころを凝視する。

ケインの靴が室内の床を叩く音。それが、老人に来客を告げた。

「いらつしゃい。ここは、何でも屋だ。何がほしい？ 穴の空いた鍋から、電気を使えないラジオまで、何でもござれ」

「何でも屋なら金次第、用意できての何でも屋。ただし、お客様は商品では御座いません」

人の良さそうな老人の目が、鋭く射殺しそうなものに。ケインは、仏頂面のままに続けた。

「用意して貰いたい物がある」

「……人間以外なら、取り寄せるかの？」

老人の目から、鋭さが抜け落ちた。

「【見滝原中学校の教師】用意出来るか？」

「用意自体は簡単じゃよ。じゃがの、相応の学力が必要じゃ。教師の力量が無ければ、意味を成さんて」

「体育教師はどうだ？ 軍属の経験がある。それを生かせると思うが」

老人は考え込む。

その内に、ケインがカウンターにドル紙幣の札束を叩き付けた。

「足りるはずだ」

「ふむ、どれ・・・」

老人が札束に目を通す。

「確かに、請け負ったわい。他にあるかの？」

ケインは無言で、懷から回転拳銃、ライフルケースから自動小銃をカウンターに並べる。

その上に、もう一つ札束。

「こいつの銃弾を頼む。この札束で、買えるだけ全部だ」

老人は目を凝らして銃を見る。

その注目は、拳銃のグリップ、小銃の銃床に。魔女のトンがり帽子を貫くナイフの紋章【魔女狩り】に見開いた。

「お前さん、こいつぁ・・・」

「依頼はそれだけだ。・・・また来る」

言って、ケインは銃をさつさと戻して、店を後にする。

吐く息の白い、夜の寒空。

ココアシガレットを一本くわえ、暗黒の路地を歩き行った。

## 事ノ最初：諦めない者達（後書き）

以前考えていたまどマギSSの没アイデア。

良い感じのが思い浮かんだので、書いて見ました。  
どういう没アイデアだったかは、活動報告にでも。

## 事ノ一：相棒

春こそ近いが、まだ寒さを残す3月の夜。

ケインは、街灯も無い工場街を歩き行く。

人気は無く、月明かりも雲に隠れて頼りない。

ココアシガレットをくわえると、ケインの足が止まる。

「自殺スポット、行方不明続出。これで怪しまずにどうする?」

突如、ケインを取り巻く工場街が移り変わる。

夜は昼。無骨な金属建造物は、柔らかな白い雲に。

天国と錯覚する空間。しかし、ケインの仏頂面には警戒と緊張。

現る気配、ケインはライフルケースから自動小銃を備える。

気配が形を成す。それは天使の銅像。だが、秘める意味は魔女。

「見た目に騙されるか。・・・死ね」

躊躇い無く引鉄を、容赦無く弾丸を。

瞬く間に、銅像は蜂の巣。

と、またも空間が移り変わる。

昼の青空が、血の色をした赤い空に。

床代わりの白い雲は、渴ききった荒野に。

天使の銅像は、悪魔の銅像に。

否、銅像ではない。牛の二本足、毛むくじゃらの両腕、羊の頭、そして肉付きのない骨のみの胴体。

それらが銅像から、色を経て動き出す。

が、ケインは微塵も動じない。

左に回転拳銃を抜き放ち、両目の部分に二発。

視界をなくし、暴れまわる魔女を体を、蹴り倒し、踏み押さえる。

「さて、仕上げだ」

右の小銃、左の拳銃が、砲火する。

「——！！??」

言葉にならない、魔女の叫び。

と、弾が切れたのか、砲火が止む。

だが、ケインは左をサバイバルナイフに持ち替え、魔女の額を突き刺す。

そのまま、開いた口に手榴弾を放り込む。

「じゃあな」

それだけ言ったケインは、数歩離れ、くわえたココアシガレットを口内で噛み砕く。

その瞬間、手榴弾がはじけた。

四散する、魔女の体。それに合わせて、地獄を思わせる空間も、工場街のそれへと戻った。

「雑魚、だったか。はてさて、お目当ては・・・」

ケインはもう一本、ココアシガレットを噛みくわえては、地面に目を凝らす。

と、靴が何かを蹴り転がす音。

転がったそれを拾い上げると、ケインの口が達成感に吊り上がった。

「格下の魔女に、目当ての代物。幸先は悪くない」

月明かりに、手のそれを照らす。  
漆黒の玉石に、針を突き刺したそれ。  
懷に仕舞い、ケインの足取りは軽いものだった。

――――

ホテルの一室。  
シングルの部屋、ケインが、ライフルケースとトレンチコートをソファに投げかける。  
テーブルに魔女から得た【戦利品】を置いては、備え付けの冷蔵庫からウォッカの瓶を煽る。  
上半身に備えた、銃のホルスターもそのまま、ケインはベッドに身を投げた。

「釣り餌は十分。では、魚の動きは……」

言って、酔いに体を委ねる。

そのまま睡魔へ、経つこと数分。  
部屋のベランダが、突如に開く。

風とともに入り込むは、一人の少女。風に黒髪を揺らす。

紫を強調とした、近代的なセーラー服。左手には円盾、甲にはアメジストのそれ。

少女の目に、男の眠る姿。

そのままに、机の上。魔女の【戦利品】を取り上げた、その瞬間。

「待ってたよ、魔法少女」  
メイガス

少女に突き付ける、銃口。回転拳銃のそれ。  
少女は驚いた様子もなく一言。

「見えるの？」

「銃を突きつける練習に見えるか？」

仏頂面に続けるケイン。

「さて、交渉だ」  
ネゴシエート

「私に交渉の必要はないわ」

「参加料は【戦利品】だ。悪く無いと思うが？」

言って、魔女のそれ、少女の手にあるそれを一瞥。

少女はため息一つ。

「銃を突きつけて、よく交渉なんて言えるわね」

「・・・失礼した」

ケインは仏頂面のまま、回転拳銃を懷に。

少女は振り返ってケインを見る。

数秒無言、口を開いたのはケイン。

「単刀直入に聞く。【ワルプルギスの夜】に、聞き覚えは」

少女の顔に驚きが満ちる。

「・・・どこで、それを？」

「聞きたいか？　なら話せ」

「質問には、ある。と、答えられる」

ケインが納得に頷き考えこむ。と、今度は少女。

「何故【ワルプルギスの夜】を知っているの？　何故、私を見るこ  
とが出来るの？」

「俺の口はひとつしか無い」

「・・・ごめんなさい」

ケインはココアシガレットを啜える。

そして、一本を少女に。

「未成年よ」

「ココアシガレットだ」

「そう」

それだけ言い合い、少女は一本を啜えた。

少女がココアシガレットを噛みながら、疑問に言つ。

その先、ココアシガレットを啜えたままのケイン。

「そういう用途じゃないでしょう？」

「癖みたいなものだ」

ケインが適当にソファに促す。  
少女が座ると、ケインが言い始める。

「まずは、俺の素性からだ。国際特殊部隊【魔女狩り】に所属していた、元歩兵部隊。ケインⅡラングロット」

懐から、回転拳銃のグリップ。【魔女狩り】のエンブレムを見せる。  
すると、少女が驚いた。

「この世界、では・・・魔女が認知されているの？」

「ああ、公には出ていないがな。存在自体は十八世紀末期から・・・  
もつとも、当時は人間をマギカ、魔女呼ばわりしたことも多かったが」

「魔女を、人が知り得た理由は？」

「魔法少女、俺達はメイガスと呼ぶがな。正確には、魔法少女だった人間の言葉だ。彼女たちは口々にこういった。この世には、人の絶望を好む魔女がいる。女神の慈悲を授かった私たちは、人々にこの真実を伝えたい、と」

「女神・・・！ その女神に関しては！？」

少女が必死に尋ねる。

が、ケインは仏頂面のまま。

「わからんさ。ただ、少女たちの言葉は文献となり、十八世紀当時の冒険家達が魔女を探したそうだ。そして、見つけた。魔女の結界を、数十人の犠牲のもとにな」

「・・・そう」

隠そうと、しかし、明らかに分かる落胆。  
触れる気はないケインは続ける。

「それと、何故魔法少女が見える。と、言ったな。【魔女狩り】<sup>メイガス</sup>の部隊には、少ないが魔法少女が属していた時期もあった。俺達部隊の人間には、魔法少女の脳細胞を移植している。理論は聞くな、詳しく分からね」

「魔法少女が属しているなら、彼女たちを頼ればいいでしょう？」  
ケインは仏頂面に首を振る。

「お前は知っているか？ 魔力を使い切った魔法少女」

「ッ！ あなたは・・・あなたも、知っているの？」

今度は首を縦に。

「実際に見たわけではないがな。魔法少女が魔女に到る、その記録は残っている。それ以降、魔法少女の部隊編入は行っていない。味方の中で魔女化されれば、ひとたまりもないそうだ」

ケインは備え付けの冷蔵庫から、ジュースとウォッカ、コップを一つ。ココアシガレットを噛み砕きながら。

少女に対面してのソファ、座り込んで差し出すジュースとコップ。ウォッカを煽ったまま、ケインが言う。

「まだ話す、少し長くなるぞ？」

「・・・ええ」

少女がコップにジュースを。

ケインは言い始める。

「二ヶ月ほど前、アメリカの田舎町。【ワルプルギスの夜】が訪れた」

少女のコップが、飲み半ばで止まる。

「【魔女狩り】の人員は少ない。一個大隊で、五分の一の人数になる。だが、俺だけを残し部隊は全滅。ワルプルギスの夜は健在だった。結果、上の出した命令は【ワルプルギスの夜】を撤退対照として扱うことだ。俺は納得いかずに、ここにいる」

どこかヤケさをもって、ケインがウォツカを煽る。

「戦友、と。そう呼べるものも死んだ。残ったのは、魔女と戦える事実、この体だけ。俺は、ワルプルギスの夜を殺す。復讐でも使命でもない。魔女との戦いを、存在意義にするために」

「何故、私にそのことを？」

少女がジュースを一口に言う。

ケインがウォツカを煽って答えた。

「取引だ」

「取引？」

「俺にとって、魔法少女の助力、しかも【ワルプルギスの夜】を知る者の助力は、喉から手が出るほどだ。そして、自身の真実も知っている。俺はお前と共闘を望む。俺の動機は話した。・・・お前の、闘う理由を話せ」

試す少女の視線。その先、ケインの目は仏頂面に見返す。  
と、少女が根負けに溜め息。

「私は、大切な友達を守るために、魔法少女になった。その願いは、私を過去に戻す力を与えた。だけど、守るために越える壁、越えられない壁がある。それが【ワルプルギスの夜】」

「それは、肯定だな？」

「ええ。・・・私の名は、曉美ほむら」

短いやり取り。

ケインはその仏頂面を、珍しく釣り上げた。

「今この時より、俺とお前は相棒だ。お前は俺の目的のために、俺はお前の目的のために、当然のように力を、命を尽くす。覚悟の上だな？」

「覚悟なら、魔法少女の時をもって既に決めているわ」

ほむらは、もう要はないと立ち上がった。開いた窓に。  
と、ケインが

「忘れ物だ」

魔女の【戦利品】を、ほむらに投げ渡す。  
ほむらは立ち止まって。

「これは、グリーンシードと言う」

「呼び名など、どうでもいい。俺は今月の終わりまで、この部屋にいる。用があれば来てくれ、相棒」

ほむらは、無表情に。

「呼び名なんて、どうでもいいわ」

事ノ一：相棒（後書き）

ほむらって相棒とかハードボイルドな感じが似合うと思うんですよ。

**事ノ概要：本作の世界観（前書き）**

いわゆる世界観説明。

事ノ最初から事ノ一までをまとめたものです。

## 事ノ概要：本作の世界観

・ケインⅡラングロッド

本作の主人公となる人物。

東洋人系黒髪黒目の26歳。

トレンチコート、ワイシャツ、ジーンズを普段着。

使用武器は、サバイバルナイフ、M686の回転拳銃、G3の自動小銃。

性格は、愛想が無く仏頂面。しかし、あくまで自身の地であり、冗談に合わせようとするときもある。

幼少期を生きるため、出身の貧困街で犯罪に手を染めながらの人生。十歳半ばの二次成長期から【魔女狩り】の部隊にスカウトされる。

行動原理は自分にできることは例外なく行う。善悪の基準は捨てており、魔女と戦うのは戦えるから。

できることを行うことこそ、存在意義を確立させる唯一の方法と考えている。

ココアシガレットが好物、食べるではなく啜えることが好物。

・本作の世界観

「魔法少女まどか マギカ」の最終話。

ほむらがまどかの決意を聞いた上でも、まだまどかを救うことを諦めなかったら。

その時に逆行した時間軸が、本作となる。

ほむらが時間逆行を行った際、まどかは既に願いを述べようとしていた。

ほむらの前では完全に述べなかったが、その事実は誤差となつてほむらの過去以前に大きな変化を与えた。

本作同様に、全てではないが魔女を消した事実が過去、幾つか存在

している。

魔女の存在を世界が認知していることこそ、その変化の一つである。

#### ・国際特殊部隊【魔女狩り】

ケインが属していた、世界からの精鋭によって結成される部隊。構成人数は5000人前後。

魔女を狩ることを目的としているが、場合によっては魔女を敵と想定しての護衛、魔女の結界に閉じ込められた人間の救助など、魔女関連全般が作戦範囲になる。

武器は基本的に個人の自由として選べるが、銃床やグリップなどに魔女のとりがり帽子を貫くナイフのエンブレム【魔女狩り】が各銃器に使われる。

その人員確保は様々で、実際に能力の高い軍人から選別することもあれば、裏社会で腕の立つ人間、傭兵などからも抜擢する。魔法少女だった人間の脳細胞を移植することで、魔法少女に干渉できる感覚を兵士に授ける技術を持つ。

人道的な問題が国際で議論された過去より、今現在で移植に使っているのはクローン細胞である。

給金は並の軍人より下回るが、魔女関連の作戦参加の数に応じて、ボーナスが支払われる。この金額が、部隊の魅力となっている。

巨大なコンピュータと衛星を用いて、一年先までの魔女の出現予定地を測定可能。ただし、現在存在している魔女に対してのみで、突発的に発生した魔女については後手に回るのが事実である。

ちなみに、魔法少女をメイガス、魔女をマギカと、部隊内では呼んでいる。

## 事ノ二：それはとっても嬉しいことよ

温かみの帯びた、3月の夕暮れ。

ホテルの一室でココアシガレットを啜えたケインが、銃の手入れをする。

座り込んだソファから、分解した回転拳銃をテーブルに並べる。細部から内部まで磨きかけると、不意に部屋に風が流れた。

ケインは、仏頂面でたしなめるように言う。

「今、銃の手入れをしている。風で部品が飛ぶと面倒だ。閉めてくれないか？ 曉美ほむら」

「気付かなかったわ、ごめんなさい」

魔法少女の服、ほむらは静かに謝罪し、入ってきた窓を閉める。

そのまま無言で立ちつくすほむら、手入れをしながらのケインが言う。

「飲み物はセルフサービスだ」

「そう」

素っ気なく、ほむらが備え付け冷蔵庫から、コップとジュースの瓶を。

魔法少女の変身を解いては、以前と同じようにケインと対面してソファに。

と、ほむらの服、白に近い生地の制服を見て、ケインが反応に言った。

「お前、見滝原中学校の生徒だったのか？」

「一応、入学予定よ。病院の記録では、退院はまだ先」

「その体も、願いの産物か……。良い意味でも、悪い意味でも」

「知っているの？ この体が、人間とは程遠いものだ」と

「記録に残っている。と、言っただろう？ 【魔女狩り】に属していた魔法少女<sup>メイカス</sup>も、一人や二人じゃない。・・・正式な記録では省かれているが、年配の隊員から聞いたことがある。彼の現役時代、第二次成長期の限界まで、成長に達した少女もいた」

「それ以上、成長はしなかった」

コップにジュースを注ぐほむらの言葉に、今度は銃の組み立てに入ったケインが頷く。

「その少女から、【魔女狩り】は魔法少女の体質を理解するようになった。だが、それから何年経っても、その少女は舞台に居た。心身ともに強かった上に、魔法少女としての力も一流だったらしい」

「今は【魔女狩り】に魔法少女はいない・・・死んだのね？」

「ああ」

組み立てた回転拳銃を、狙い撃つように構え、動作を確認。仏頂面を満足に唸らせ、今度は小銃の分解を始める。

ほむらはジュースを一口飲んで、疲れたかのように天井を見上げる。

と、ケインが分解の手を緩めずに、言い始めた。

「その話いわくな、おかしい点があるらしい」

「・・・興味は、あるわ」

分解を磨きの作業に変えて、ケインが言い続ける。

「その魔法少女が死んだ原因。それは、作戦指示の誤認にあった。魔法少女を含む小隊は、間違った突出により孤立。援軍が到着したときには、小隊は全滅。魔法少女は、魔女になっていた」

「それは、魔法少女にとっては現実。おかしいと思う点はないわ」

ジューズを一口に流し、淡々と言う。

「ああ、おかしいのはここからだ。小隊の所持品から、無線機の記録を入手した。誤認という時点で、調査の手はあった。そして、小隊と本隊の無線の内容が違っていた」

「どうということ？」

ほむらの声に、好奇心が宿る。

ケインは手入れの手を止め、今のココアシガレットを噛み砕いては、次のココアシガレットを啜える。

そのままに言い続けた。

「本隊では【指示があるまで待機】と命令した。だが、小隊では【これより突撃せよ】と伝わっていた。聞き違いじゃない、通信内容そのものが伝わっていた」

「そんなことが・・・。まさか・・・！」

気付いたように、ほむらのつばやき。  
そのままに、ケインに尋ねる。

「あなたは、キュウベえを知っている？」

「記録上では、な。絵の得意な魔法少女から、その姿を書き写した記録がある程度だ。実際に見たことはない」

「そう、なら聞いて。その無線機の指示、改変したのはキュウベえかもしれない」

「銃の手入れに聞く話じゃないな。聞かせてくれ」

仏頂面のケインの目が、心なしか鋭く、軍人として培ったそれになる。

「キュウベえが、契約の代償に魔法少女を求めることは分かる？」

「ああ、記録のとおりだ」

「面倒が省けるわ。・・・キュウベえの目的、それは魔法少女が魔法に到る際に発生するエネルギーの採取。ひいては、魔法少女を魔法にすることこそ、キュウベえの目的と取れる」

「動機は分かった。出来れば、手段の推論も欲しい」

ケインの何気ない一言。ほむらは意外そうに言う。

「・・・信じるの？」

「お前は騙すつもりなのか？ 相棒」

「いえ」

ほむらの頬が、僅かに緩む。だが、すぐに元に戻る。

「キュウベえは、魔法少女達をテレパシーで会話させる事ができる。そのテレパシーで、自分自身が話しかけることもね」

「テレパシー、無線機・・・電気信号か？」

ケインの推論の呟き。ほむらは静かに頷く。

「あいつなら、通信に細工を施すことも可能かもしれない。・・・それだけじゃない。私が友達を守るために、あいつに契約させる訳にはいかない。見つけたら、出来る限りでいい、あいつを阻止して。場合によっては、武力行使でも構わない」

「キュウベえは、お前の友人を契約させるために躍起になるのか？」

「あの子は、とてつもない魔力を秘めている。キュウベえにとって、それは魅力的なエネルギーよ」

「その話、友人には？」

「こことは違う【過去】で、言ったことはある。でも、誰も信じなかった。魔女化する魔法少女を、見るまでは」

「深くは聞かないが、つまりこのまま話しても信じる可能性は低い  
か」

ほむらは黙って首を縦に。  
と、ケインが提案に。

「暁美ほむら、その友人たちに接近できるか？」

「え？」

「お前を信用させた上で、キュウベエの信用を落とす。接触させなければ、越したことはないがな」

仏頂面のケインに、落ち着くも期待の混じった声でほむらが。

「出来るの？ そんな、ことが」

「俺次第、お前次第、だな」

――――

見滝原中学校。

教室から廊下に到まで、壁一面ガラス張りの校舎。陽光をふんだんに取り入れる造りのそれ。

その一室、職員室。トレンチコートの青年、ケイン。  
教師の注目を集め、自己紹介に言う。

「この度、見滝原中学校に体育教師として来ました、ケイン＝ラン  
グロッドです。若輩者ですが、よろしく願います」

仏頂面に事務的口調で言う。

小さく拍手の響く部屋、髪の毛が薄い教頭が言った。

「えー、はい。では、ラングロッド先生はまだ経験も浅いでしょうし、副担任と言う形で就いて頂きましようか。・・・ふむ」

教頭の目が止まる先、女性が一人。

栗毛色のボブカット、眼鏡が知的なイメージを与える教師。

「では、早乙女先生、頼めますかな？」

「え？ あ、は、はい！」

自分とは予想外。という反応。  
落ち着こうと、咳払い一つ。

「コホン！ では、自己紹介をしましょうか。私は早乙女和子、二年生のクラスを担当しています」

「はっ、了解しました、早乙女先生」

背筋を伸ばし、かかとはそろえ、手は垂直の下。

まるで隙のない返事の仕方に、和子の目が丸くなる。

「き、きつちりとした方なのですね。大学では、そのように？」

「いえ、元は軍属でしたので、そちらで」

「ぐ、軍属！？」

聞きなれない言葉に、驚きの声。  
ケインは仏頂面のままに言う。

「知られて困ることではありませんが、あまり意識されるのも心地よくありません。出来れば、新人として接して頂きたい」

「そ、そうですか。すみません、驚いてしまつて」

と、いつの間にか和子が、指し棒を持ったままに尋ねる。

「ところで、ラングロッド先生。目玉焼きは半熟派ですか？ 堅焼き派ですか？」

どこか怒りさえも感じる言葉。しかし、ケインはやはり仏頂面。

「堅焼きです」

「そうですよね！ 卵なんてちょっとかたいくらいでちょうどいいんです！ 半熟に何の価値也没有せん！」

喜んで怒る、いそがしい和子。ケインは、微塵も表情を変えない  
仏頂面。

その手を力強く握る。

「あなたとは、気が合いますね！」

「そう、ですか？」

喜ぶ和子、仏頂面のままに傾げるケイン。そこに響く、第三者の声。

「早乙女先生というのは、こちらでしょうか？」

落ち着きに満ちた、静かに響く声。

声の主はほむら。白を主体とした、見滝原中学校の制服を体に。  
和子が思い出したかのように、答える。

「あら、暁美さん！　こちら、今日から副担任となるケイン＝ラン  
グロッド先生。よろしくお願いね」

ケインとほむらは、数秒に視線を交わす。  
そして、初対面の挨拶。

「暁美ほむら、です。初めまして」

「こちらこそ、よろしく」

ケインはそのまま、和子に向き直る。

「早乙女先生。早く慣れておきたいので、今日のホームルームを任  
せてもらえませんか？」

――――――

ガラスの取り入れた陽光が、廊下に幻想的な雰囲気を与える。  
その最中、ケインに続いてほむらが後ろに。  
と、ほむらが唐突に言う。

「まさか、教師になつてとは思わなかったわ」

「見滝原中学校なら、いずれは知るだろう。元々は魔法少女メイガスを探すためだ。中学校の教師なら、第二次成長期の少女と接触する機会は多い」

「てつきり、魔女を探しまわるばかりだと思ってた」

「職質の為に、身分の後ろ盾は必要だ。昼なら不登校の生徒探し、夜なら非行少女少女への夜回り」

「口八丁まで、用意周到ね」

「お前も用意はしておけ。そろそろ、教室だ」

ガラス張りの壁は、教室からでも廊下を見渡せる。

生徒にとって、見知らぬ青年と顔立ち整った女生徒。それは、好奇心のままに注目する。

ケインは仏頂面ではあるが、あまり良い居心地は持たない。

「曉美は、こういう視線には？」

「慣れています」

話し方は、教師と生徒。演じるそれ。

「このガラス張り、ある意味設計ミスだと思うのだが。これでは落ち着けん」

「カンニングなどの防止には良いと思われますが」

「なるほど、一理ある」

会話のまま、一つの教室に。

ケインが副担任、ほむらが転入生として。見覚えのない人間の入室、クラスは当然どよめく。が、ケインは動揺もない仏頂面で。後ろ腰に両手で立つ姿は、さながら軍人。

「今日からこのクラスの副担任になる、ケイン＝ラングロッドだ。そして、こちらが転校生の」

促され、ほむらはホワイトボードの前に。

「暁美ほむら、です。よろしく願いします」

簡潔に無駄のない自己紹介。

啞然に残ったまま、拍手をするクラス。

その最中、ほむらの視線は一点。

先には、一人の女生徒。桜色の髪をショートツインに結えた、赤いリボンがよく映える。

同年代から見れば、やや幼さの残る顔立ち。ほむらの視線に気付いてか、不安気に目を彷徨わせる。

と、ケインがクラスに、副担任として言う。

「では、出席を取る。暁美は席についてくれ」

ケインとほむら、すれ違いざまに小さな声で。

「あの少女か？」

「ええ」

それだけやり取りし、席に着くほむら。

出席薄片手のケインの目が、誰にも気付かれないよう一瞬だけ、桜色の髪の少女、名簿から知った「鹿目まどか」を一瞥した。

――――

経つ時早く、放課後。

皆が帰り支度を進める中、ケインが教室に。

「先生、さよならー」

「ああ、気をつけて帰宅しろ」

すれ違う男子生徒と挨拶。

確か中澤くんだったな。と、思い出すように呟き、視線を定める。目先にはほむら。チラチラと視線の泳ぐ先には、三人の少女の輪。ケインは仏頂面に、呆れ声で。

「何やってるんだ、お前は」

「ケイン！ 先生・・・」

「接触はどうだ？」

「そ、その、えっと・・・」

気弱そうに指をいじるほむら。その様子が、ケインに察させた。

「どう話せばいいかわからない、か」

「し、仕方ないじゃない……。その、今までの、行動が……」

「ついて来い」

強引にほむらの手を取るケイン。

そのまま、一瞥していた三人の少女たちに。

一人は鹿目まどか。もう二人は、水色のショートカットに活発そうな少女。緑髪のウェーブヘアの、おしとやかな印象の少女。ケインに気付いた三人に、そのまま名前を述べていく。

「お前たちは確か、鹿目まどか、美樹さやか、志筑仁美、だったな」

「あら、ラングロッド先生。どうかなされました？」

答えたのは、緑髪の少女、志筑仁美。

鹿目まどかと水色の髪の少女、美樹さやかの視線に、ほむらがうつむいてしまう。

ケインはそのまま

「暁美は、ついこの間まで入院していたからな。この街のことをよく知らない。お前たちさえ都合が付けば、案内を頼みたいのだが」

「うん、オッケー！ 転校生のことは、あたしがちゃんと面倒見させて頂きますよ！」

頼もしく、さやかが答える。

「わかった、では頼むぞ」

「ちょ、ちよつと、ケイ・・・ラングロッド先生!」

ほむらの呼び声虚しく、ケインはさっさと教室を去る。  
と、そこにまどかの差し伸べた手が。

「えつと・・・それじゃ、よろしくね、暁美さん」

その笑顔、差し伸べた優しい手。ほむらの、まどかへの最も古い記憶とその姿が重なる。

失う姿を焼き付けた脳裏、それが覚えた感情は、涙を表す。

「あ、暁美さん! ど、どうしちゃったの!？」

涙に慌てたまどかが可笑しくて、ほむらは必死に作った笑みで。

「ほむらで、いいわ・・・まどか」

事ノ二：それはとっても嬉しいことよ（後書き）

タイトルは、ほむらとまどかが再び友達に。というのを込めまして「おりこ マギカ」でも友達にはなってるけど、本編の出来事を経て再び友達になるのは、感慨深いものがあります。

### 事ノ三：俺も関係者だ

夕暮れの光り射す、見滝原中学校の職員室。

事務机の上で、授業スケジュールを黙々と作成するケイン。

その向かいの机、和子が携帯電話片手に小声で話す。

「・・・でね、その新人さんが、こう、気が合いそうなのよ」

「・・なあ、和子。早めに仕事終えて、電話したのはあたしの方だ。あんたが男と別れた愚痴くらいは聞いてやるが、たかが目玉焼きが堅焼き派っただけで、そう意識するのも・・・」

「何よ、絢子は結婚してるからそんな事が言えるのよ。ちよつと無愛想な人だけど、仕事ぶりは真面目だし、落ち着いてるし、転校生がクラスに溶け込めるよう、気遣いもしっかりした人なんだから」

「・・はあ、そんなに言うなら、いつそ食事にも誘っちまえばいいじゃない」

面倒そうな電話の向こうの声。対して、気付いたように輝く和子の顔。

「そう・・・そうよね！ 何事も行動！ さっそく気持ちを聞いてみるわ。ありがとう絢子！」

「・・あ、ちょ、まで、早まるな失言だった、ちよつと落ち着い・・・」

電話の向こうの静止も虚しく、和子は電話を切つてはケインへと向く。

丁度、ケインも作業を終え、机から立ち上がったその時。

「ラングロッド先生！これから、お食事でも・・・」

「ああ、早乙女先生。これから用事がありますので、先に失礼させて頂きます」

「え！？あの・・・」

止める間もなく、さっさと立ち去るケイン。

「あうう・・・間の悪い・・・」

うなだれる和子を気の毒にか、女性の教師仲間が慰めに。

「あの、良かったら飲みに行きましようか？」

「うう・・・ありがとうございます」

――――

夕暮れの見滝原の街。

帰宅時の学生や、仕事帰りの人間が溢れる街道を、ケインが見渡し  
ながら歩き行く。

と、前から見知った緑髪。

ケインと目のあった女生徒は、目前まで来ては挨拶を。

「あら、ラングロッド先生。今おかえりですか？」

「志筑か。曉美はどうだ？」

「まどかさんとさやかさんが、ちゃんと付いていますわ。先生は、今おかえりですか？」

「ああ。・・・実は、曉美に伝え忘れたことがあってな。急ぎではないのだが、時間がある内にと想着てな。何処にいるか知らないか？」

「皆さんでしたら、確かCD屋に寄って行くと、おっしゃっていました。・・・あ、すみません。習い事がありますので、これで失礼します」

「ああ、気をつけてな」

別れ挨拶を交わし、ケインが考えこむ。

「CD屋か、確か・・・ん？」

CD屋がどの位置にあったかを思い出そうと、その矢先。明かりの点き始めた街灯、その上。一匹の動物が見えた。

猫に近い体、体と同じ比の尻尾、耳から生える長い垂れ耳、白い体毛。

以前資料より、ケインが見たことのある特徴。キュウベえのそれと合致する。

そして何より、周囲の人間が気付いていない。キュウベえの存在に。それが、確証を持たせた。

「あれが、キュウベえか・・・」

近づこうとした矢先、キュウベえは路地裏に飛び込んでしまう。

「気付かれたか・・・？」

疑問を抱えつつ、キュウベえの後を追うケイン。

気付かれないように、裏路地を走りゆく。

しばらく追跡が続く。が、その先には、4メートルはあろう壁。キュウベえは軽やかに、窓の軒先を足場にして登る。

「ちつ、面倒な・・・」

軽く悪態に、ケインも周囲のビル壁を足場に、三角跳びの要領で壁を超える。

着地の先、そこはビルの建設現場だった。

時間のお陰か、夕暮れ時の現場に人気はない。

ふと、ケインは気付いたことを口に。

「そう言えば、この近くにCD屋があつたな」

「何か用かい？」

背後からの声。一瞬で、懷から抜き放つ回転拳銃、M686。

銃口の先には、ドラム缶の上、キュウベえの姿。

「やれやれ、物騒だね」

「いつから、気付いていた？」

キュウベえは、馬鹿にした口調で。

「初めからに決まってるじゃないか。君は、他の人間よりも違った気配を持っているからね。ボクを視認出来るのが、その証拠だよ」

ケインは銃を下ろす。だが、懐には戻さず、右手に備えたまま。

「で、俺を呼んで何のつもりだ？ 初めから気付いていたなら、撒くことも出来るはずだ」

「別に君に付いて来られても、都合の悪いことはないからね。君の好きにするといい。そう言いたかっただけだよ」

キュウベえは、建設中のビルに入り込む。

「鬼か、蛇か、何のつもりだ？」

言って、ケインも続く。

ビルは薄暗く、陽の光が届き切らない。  
しばらく歩くと、キュウベえの姿が。

「ここで何をするつもりだ？」

「やれやれ、本当についてくるなんてね。まあ、自業自得だよ」

感情の感じられない声色。何処と無く殺意を覚えるそれ。  
ケインの目が、軍人として鋭くなる。

「何だと？ どういう・・・ッ!？」

ふと、気付く感覚。芝生の足場、ドーム状の建設物空間。

そして、勘が騒ぐほどの、殺意、憎悪、悪意の塊。

振り向きざまに向ける銃口、そこに【魔女】はいた。

バラの茂みのような頭、四足歩行の胴体、細い前足が数本。

明らかに、ケインが以前相手をした魔女とは、桁が違っていた。

「これがお前のやり方が、キュウベえ・・・！」

――――――――――

一方、場所は変わってCD屋。

近代的な内装。それなりに繁盛している人賑わいの中、各々が店内を自由に歩き回る。

「うーん、こっちにしようかなあ？ それとも、こっちなあ？」

さやかがクラシックのCD選びに悪戦苦闘。

「あ、これいいかも」

選んだまどかの手には、演歌のCD。

「え……。まどか、演歌好きなの？」

「ん？ へんかな？」

「マイナ、と言っておくわ」

まどかとほむらは、CDを選んでは談笑に花を咲かす。

ふと、まどかの頭に響く声。それは、音を介してのものではない。

（大変だ！ まどか、助けて！）

「え？」

まどかは周囲を見渡す。

だが、助けを求めるような者はいない。

「まどか？ まさか・・・」

ほむらの気付いたかのような反応にも、まどかは上の空。  
先の声を聞き逃すまいと、自分の頭に意識を集中する。

（時間がない！ 人が魔女に襲われているんだ！ 助けられるのは  
君しかない！）

「だれ？ どこなの？」

「まどかッ！」

心の臓まで揺さぶられるような声、周囲の視線も意に介さず、ほむ  
らが言う。

「大丈夫。私に、任せて」

「ほむら、ちゃん・・・？」

「いい、まどか？ 絶対、付いて来ようなんて考えないで。私が、  
何とかするから」

力強く言って、ほむらがCD屋を飛び出す。

指輪が紫の光を発して、アメジストの玉石、ソウルジェムに変わる。輝きを発するソウルジェム。ほむらは憎々しく呟く。

「魔女が近くに・・・以前と同じ・・・！」

人気のない路地に駆け、ソウルジェムを介しての変身。

魔法少女の服を、夕暮れの風になびく。左腕の円盾が、夕暮れに輝く。

そのまま、跳躍。建設物の屋上を飛び移って、向かう先はビルの建設現場。

ほむらは悪態に呟く。

「いつも卑怯な手ばかり、インキュベーター・・・！」

――

庭のような魔女の結界。

ケインが魔女に向けて、回転拳銃を放つ。

正確な狙いは、当然のように巨体に命中。しかし、拳銃弾は致命打には遠い。

今度は、魔女の突進。

ケインは、横に転がって躲す。

そこに伸びる、魔女の蔦。

ケインの体を絡め、捉えようとする。それを飛び退き、抜き放つサイバルナイフで斬り払う。

ナイフの左腕を、蔦に絡め取られる。しかし、蔦に銃口を突きつけ、発砲。

蔦を銃弾で撃ち千切っては、魔女から飛び退く。

「くそっ、拳銃じゃあ、ストップピングパワーに欠ける。手榴弾くら

い、持っておくべきだったか」

近付く魔女、ケインがギリギリと後退する。  
だが突然、魔女の周囲で爆発が起こった。

「爆発物？ 一体・・・」

「ケイン、何をしているの？」

魔女が怯んだ隙、ケインの前に降り立つほむら。  
黒髪を掻き上げて言う。

「キュウベえを見つけたんだがな、まんまとこのザマだ。笑ってくれ」

「あいつの本性、身にしみて何よりよ。・・・ところで、拳銃で事足りる？」

ほむらの目は、ケインの回転拳銃に。

「正直辛い、アテがあるのか？」

「ええ、ご覧のとおりよ」

ほむらの円盾、裏側からまるで、叩き売りのように流れ落ちる銃器の数々。

ケインの仏頂面が僅かに釣り上がる。

「料金は？」

「相棒サービスよ」

淡々と言うほむらに、ケインが武器を検討。  
拾い上げたのは、手榴弾一つ。  
その様子を、怪訝にほむら。

「それだけなんて、気でも触れたのかしら？」

「【魔女狩り】の戦い方、見せてやるさ。・・・援護、頼めるか？」

「今更、ね」

ほむらはMk48の軽機関銃、ケインは右にナイフ、左に手榴弾を。  
爆煙から、魔女が這い出る瞬間。ケインが駆け出す。

魔女からの蔦。同時に、ほむらの軽機関銃による弾幕。蔦を銃弾が  
撃ち千切る。

その隙、魔女の懷に潜り込むケイン、ナイフで胴体を深々と刺す。

そのまま、傷からを抉り広げるように、力任せに斬り裂く。

「獲った・・・！」

狩人の笑みを、ケイン。その傷に、手榴弾を力ずくでねじ込む。

深く達したそれ、ピンを引き抜き、魔女から飛び退く。

そして、爆発。体内からの破壊エネルギーに、魔女の体が四散する。  
飛び散る肉片となる、魔女の体の一部。だが、爆煙の向こうに魔女  
はいない。

ケインが、悔しげに呟く。

「仕留め損なった、か・・・」

「グロテスクな戦い方ね」

と、ほむらが皮肉に。

「戦いそのものが、グロテスクと密接だろう？」

「確かに、ね」

仏頂面のケイン、淡々と冷静なほむら。

魔女の結界である周囲を一瞥して、ケインから。

「気付いたか？ 魔女が逃げても、結界が解けない」

「どこかに使い魔が・・・？ ツ！ しまった！」

ほむらが気付きに声を。

「使い魔はここにいない。そう、別の場所にいる」

ほむらが駆け出す。続くケインが、駆けながら話しかける。

「使い魔が別の場所にいる、その理由・・・俺達以外に人間が？」

ほむらが首を縦に。

「まどか、だと思う。以前も、そうだった」

どこか苦しい感情に、ほむらが言った。

――

不規則な背景、工事現場の道具を無理やりつなぎあわせたそれ。

周囲を葉茎と綿毛の頭の怪物、結界と魔女特有の使い魔。

その合間を、まどかの手を引いたさやかが、悪態を口に駆け抜ける。

「なんなのよお！ こいつら！」

「わかんないよ！ でも、この近くにまだ人が残ってるはずだよ！」

まどかの必死な叫び、さやかは逃げながら周囲を見て。

「でも、こんなじゃあたし達が！ どうしようもないよ！ 警察を呼ぼう！」

「う、うん。でも、ここどこなんだろう？」

「たしかに、変なところ……。って、やば！」

足が止まる。見渡す限りの使い魔が、逃すまいと囲む。  
まどかが不安気に言う。

「ど、どうしよう？」

「これは、ピンチかも・・・？」

さやかの言葉に、近づき始める使い魔。

恐怖に身を寄せ合う、二人。

だが突然、巻き起こった光が、二人を守るように囲む。  
啞然とする二人に、届く少女の声。

「よかった、まだ無事みたいね」

歩き現る、少女の姿。

金の髪のロールヘア、中世ファッションを思わせるスカート、黄色のリボんタイが映える。

幾分大人びた笑みを、二人に向ける。

「すごい・・・！」

「ど、どちら様？」

感嘆にまどか、動揺にさやか。

少女は不敵な笑みを、使い魔に。

「悪いけど、話は一仕事片付けてからね！」

少女が飛び上がる。

その瞬間、無数のマスケット銃が宙を埋め尽くす。

少女が使い魔に手を向けた瞬間、マスケット銃が一斉に砲火する。着弾に爆破の威力を伴う銃弾は、瞬く間に使い魔を消し去った。

少女が一息に着地し、二人に振り返っては笑み。と、そこに駆け現る、ほむらとケイン。

ほむらがすぐに、まどかに駆け寄る。

「まどかッ！ 無事！？」

「ほむらちゃん！？ それに、ラングロッド先生・・・？」

「な、なんで転校生と先生が・・・？」

把握できないまどかとさやか。だが、ケインは相も変わらず仏頂面の上に無言。いや、周囲を警戒に見渡す。魔法の結界が解け、薄暗いビルの内装に。しかし、その警戒は解かない。

と、少女が仕切り直しにと、話しかけた。

「その制服・・・あなた達は、見滝原の生徒ね。私は、魔法少女の巴ミミ。あなた達と同じ学校の三年生よ」

変身を解いてのマミは、その目をほむらに。

「あなたも、魔法少女みたいね。そっちの先生を助けに来たってところかしら？」

「そうなるわね」

ほむらも変身を解いては、黒髪を掻き上げる。と、そこに届くキュウベエの声。

「よかった、無事だったんだね。まどか、さやか」

ダンッ！ と、誰よりも早い銃声。それは、ケインの回転拳銃が、キュウベエの足を狙ったものだ。

仏頂面のまま、敵意のこもった声のケイン。

「よく顔を出せたな。・・・いい覚悟だ」

銃口とキュウベエ。そこに割って入る、マミ。

「この子は、さっきの使い魔とは違う。銃を向ける理由はないはず

よ」

「巴马ミ、と言ったな？ そいつは、なんだ？」

「私の友達よ。出来れば、先生にも仲良くして欲しいのだけど」

ケインは仏頂面のまま、銃を下ろす。

キュウベえは意も介さず、まどか、さやかの二人に近づいては。

「実はね、君たち二人にお願いがあるんだ」

「魔法少女になってほしい、か？」

言葉はケイン。

その場の皆が注目する中、キュウベえが尋ねる。

「君は何者だい？ ボクや魔法少女を見えることが出来る上、ボクの役目まで知っている」

「体育教師。と言っても、納得はしないか」

「まあ、ただの教師が拳銃ってのは・・・」

と、さやか。まどかも首を縦に振る。

ケインは仏頂面、回転拳銃を手先で回し、グリップのエンブレム【魔女狩り】を見せるように。

「国際特殊部隊【魔女狩り】、元歩兵部隊のケイン＝ラングロッド。言葉通り、魔法少女と同じく魔女を狩ることを生業としていた。言わば、俺も関係者だ」

言って、ケインはココアシガレットを一本啜えた。

### 事ノ三：俺も関係者だ（後書き）

一応、【魔女狩り】の部隊の守秘義務は軽視されてます。だからケインもこんな簡単にばらしちゃうんです。

知られても困らない。と言うより、知られても世間は信じない。と、たかをくくった意味です。

## 事ノ四：賭け

夕暮れのマンション、マミが自室の扉を開いて言う。

「それじゃ、みんな上がって。先生もどうぞ」

『おじゃましまーす』

「ああ、言葉に甘える」

訪問の挨拶に、まどか、さやか。仏頂面に答えるケイン。ほむらは無言で。

促された通りに上がる。

部屋の内装。壁一面が窓ガラスのそれが、夕日を存分に取り入れる。最低限の家具が、その夕日を一層引き立たせた。

「きれいな部屋・・・」

「・・・そうね」

まどかが感嘆に、ほむらは懐かしさを込めて。

と、マミがいつの間にやら、ケーキと紅茶を乗せたトレイを持ってきた。

「それじゃあ、長くなるだろうし、お茶しながらにしましょうか」

「うわぁ！ 美味しそう！」

と、さやかが歡喜に。

皆がテーブルに着くが、ケインだけはココアシガレットを啜えて、壁に背を倒す。

マミは残念そうに。

「ケーキはお嫌いですか？」

「無愛想な男がいても、楽しくはないさ」

仏頂面、皮肉に言う。

と、さやかの顔に悪戯の笑みが。

「ひょっとしてー、女学生に囲まれて恥ずかしいとか？」

「ん？ 何故、恥ずかしくなるんだ？」

本当に把握できてない答え。

さやかが敗北感に。

「な、なんて揺るぎない答え・・・」

「あはは・・・。それで、マミさん。魔法少女っていったい・・・」

まどかが仕切り直しに尋ねる。

と、マミの目はケインに。

そこに、ほむらが答える。

「大丈夫よ。ケ・・・先生は、魔法少女とその役目については一通り、知っているから」

「そう？ それじゃあ、二人には改めて説明しましょうか」

紅茶を一口、マミは自分のソウルジェム、トパーズによく似たそれを見せた。

「これは、ソウルジェムって言うてね。キュウベえとの契約の際に受け取る、魔法少女の証なの」

「契約って？」

疑問のさやかに、キュウベえが。

「ボク達は、魔法少女に魔女と戦う使命を課すんだ。代わりに魔法少女になる少女の願いを、何でも一つ叶える」

「何でも一つ！？ 金銀財宝、満漢全席、更にはあんな事も！？」

「あ、でも・・・その戦わなきゃいけない魔女ってなに？」

期待膨らますさやかをよそ、まどかが不安気に。

答えたのはキュウベえ。

「マミのような魔法少女が希望を振りまく存在なら、魔女は絶望を撒き散らす存在なんだ」

続けてマミ。

「世間でよくある、理由のはっきりしない自殺や殺人。そういった事件はかなりの確率で魔女の呪いが原因なの、だけれど・・・」

歯切れ悪く目線の先、そこにはケイン。

返事の代わりか、ココアシガレットの噛み砕く音が響く。

「ああ、各国の上層は、魔女の存在を認知している。公にでないのは、情報規制と言うより、言っても信じないから、だがな」

「ラングロッド先生ってさ、一体何者？ 【魔女狩り】って何？」

ケインは今のココアシガレットを噛み砕ききつては、次のココアシガレットを啜える。

「守秘義務はないが、少し長くなる」

――――

【魔女狩り】の部隊、その実体を話し終えた場合は、ほむらを除いて啞然。

まどかが以外とばかりに。

「魔法少女のことも驚いたけど、ラングロッド先生が軍人だったなんて」

「何と言うか、急展開な日ですなあ」

慣れたのか、日和見に言うさやか。

マミはキュウベえに。

「キュウベえは知ってたの？」

「【魔女狩り】という組織はね、彼が【魔女狩り】とは思わなかったけど」

ケインは一瞬、誰も気付かない敵意をキュウベえに。

「一応、元が付くんadena。さて、俺の説明は終わりだが」

仕切り直しとなる言葉。

まどか、さやかは、魔法少女に成るか否かで迷う。

そこに、マミが提案に。

「ねえ、二人とも。魔法少女に悩んでいるのなら、しばらく私の魔法退治に・・・」「ダメよッ！」

突然、心の臓まで揺さぶるような声。

言ったほむらは、バツが悪そうに目を逸らして続ける。

「お願い、です。まどかを・・・この二人を、戦いに巻き込まないで」

真剣な顔。その剣幕に、まどか、さやかは声が出ない。  
だが、マミが気押されまいと返す。

「で、でも、最終的に決めるのはこの子達自身よ。その為にも、魔法退治を目の当たりにしたほうがいいと思うわ」

「俺は反対だ。みすみす危険な場所に、一般人を連れて行く判断は理解できん」

言ったのはケイン。マミの言葉、今度はケインに。

「大丈夫ですよ。いざとなったら、私が守ります」

「その言葉、守れなかった後に言えるか？」

「え・・・」

場が凍る。

ケインの言葉は、軍人としての現実味を帯びていた。

「部隊にな、民間人を魔女から守る。と、息巻いていた新人がいた。動機は立派だが、どうなったと思う？」

返す言葉のない中、ケインが続ける。

「初陣で、上半身を魔女に食われた」

今度は衝撃。ほむらでさえも、その言葉に動揺する。

言葉を失ったマミに、ケインがそのまま。

「死ねば、言葉は意味を成さない。鹿目、美樹、お前たちは、死地に自ら出向きたいのか？ それとも、戦いを好むのか？ 戦わなければならぬ義務があるのか？」

否定を表す無言。

ケインはマミに言う。

「死亡率を高める判断に、俺は賛成できない」

大人の冷静な言葉。

それは、少女から反論を奪った。だが、ケインは続ける。

「よって、生存率を高める案を出す。今後、魔女退治は俺と暁美、巴の三人で行う」

今度は以外とばかりに、皆の反応。  
真っ先にほむらが言う。

「先生、それは・・・」

「おかしいか？ 魔法少女の戦闘力は、個体差はあれど足手まといにはならない」

「反対とは言いません。少し、驚いただけです」

どこか懐かしげに、そして嬉しげにほむら。  
ケインはマミに。

「俺も暁美も、攻撃方法として銃器を使う。魔力消費の少ない仲間  
は、そちらにとっても悪くはない筈だが？」

「あ、えっと、反対じゃなくて、その・・・いいんですか？」

不安気に、どこかケインを恐れてのマミ。  
ケインはいつもの仏頂面。

「鹿目と美樹は連れていけない。それが条件だ・・・飲めるか？」

「・・・はい、私が甘かったみたいです」

マミの振り向く先、ほむらに言う。

「曉美さん、魔法少女どうし、よろしくね」

「あ……ええ、こちらこそ」

微笑み合う二人。まどか、さやかも、胸をなでおろす。

ケインは仏頂面に夕日を見る。

そのケインを無言で見るキュウベえ。その思惑は、わからない。

――――――

噴水の湧き出る、夜の公園。

虹色のライトが幻想的な空間を表す。その噴水池の手すりにケインが背もたれに、ココアシガレットを一本啜える。

と、そこに近づく足音一つ。

ケインは、その人物を呼ぶ。

「来たか、ほむら」

「帰り際に呼ばれたけど、なんの用？」

制服のまま、ほむらがぶつきらぼうに。

ケインが答える。

「バマミに、真実を伝えないのか？」

「……ダメ。錯乱して、最悪こつちを攻撃してくる」

「ワルプルギスの夜に対抗するには、魔法少女の戦力は重要だ」

「私とあなたで倒せばいい」

「ワルプルギスの夜と、戦った人間の意見とは思えない」

ほむらの目が鋭く、ケインを睨む。

ケインは臆さず介さずに、言う。

「俺の目の前で、あいつは百の兵が集うビルを、ほんの数秒で消し飛ばした。爆撃や一斉掃射をものともしない。倒すには、ひとりでも多くの魔法少女が必要だ」

「まるでキュウベえね。そんなに魔法少女を欲しがるなんて」

皮肉にほむらが。だが、ケインは特に気にせず。

「一般人が魔法少女になればいいとは思わない。だが、既に魔法少女となった人間なら、どうしようもない。共に戦い、生存率を高めるべきだ」

「短い間、世話になったわね。もう組むのはやめましょう」

呆れたように言い放つほむら。

ケインは尚も仏頂面のまま、その背中に。

「逃げるのか？」

「・・・なんですって？」

振り向くほむら。ケインは続ける。

「確かに、人間一人越えられない奴が、ワルプルギスの夜を越えるなど言語道断、か。お互い、的外れの相棒だったようだ」

そう言つて、ケインはほむらと真逆に歩き出す。  
と、ほむらの声が。

「わかった。なら、バマミと交渉してみなさい。あなたが後悔する様子、見届けてあげる」

ふと、ケインの顔が珍しく、釣り上がった。

「なるほど、裏表<sup>コイントス</sup>か。俺のオッズは命だが、お前は何を賭ける？」

「二度と相棒解消しないと、誓つてみせるわ」

ほむらは黒い髪を掻き上げて、冷静な顔に挑発的と言った。

#### 事ノ四：賭け（後書き）

意見の対立、これがあってこそ相棒との絆は深まるものだ。

コイントスっていうのは、言葉遊びです。マミさんを交渉できたら勝ち、裏。交渉できず錯乱に巻き込まれて死ぬなら、表。

交渉失敗で生き残ったら？ 野暮なこと聞かないでくださいよ；

## 事ノ五：人間は鉛玉一発で死ぬ

ほむらとの賭けより翌日。

真昼、見滝原中学校の運動場。

ケインが体育教師として時間測定をつとめる中、一斉にスタートした女生徒が駆け抜ける。

その先頭、三年生で一際速い女子は、巴マミだった。

「いい記録だな、巴」

「そうですね？　でしたら、少し嬉しいです」

息を整えるマミと、軽く言葉を交わす。

そのまま、友人の輪に戻る背を、ケインが仏頂面に眺めていた。

――――――――――

時は少しと、昼休み。

見滝原中学校の校舎屋上、ケインが目下の校庭。

並木の憩い場、その一角で昼食をとる女生徒集団。

その目を、女生徒の一人、マミに定めては、ココアシガレットを啜えて呟く。

「巴マミ。成績優秀、容姿端麗、社交的。男子には高嶺の花、女子には頼れる相談役、か」

「どう？　はかどってるかしら」

ふと、屋上に声。

ほむらが、ケインに。  
ケインが尋ね返す。

「学友に付き合わなくていいのか？」

「すぐ戻るわ。・・・昨日の勝負、取り消してもいい」

ケインが仏頂面に、鼻を鳴らした。

「何を馬鹿な」

「馬鹿はあなたよ。何をムキになっているのよ。巴マミには、やっぱり隠しておいた方が・・・」「舐めるな、小娘」

ケインの声は、いつもの無愛想なそれ。

しかし、言い表せぬ威圧感が、ほむらから反論を奪う。

「言っただろう？　ワルプルギスの夜が、たかが二人でどうにかなる魔女か。俺には、一人で戦おうとするお前の方が、ムキになるように見えるがな」

ほむらの冷静な顔に、怒りが宿り始める。

「貴方に何が分かる！　・・・私だって、みんなに話した。けど、信じてもらえなかった。・・・だから、一人で戦うしかないのよ。まどかを守る・・・その為に。一人だからこそ、手段は問わない」

「それは、別の話だ」

「同じよ。同じ時間、月日、状況。どれも変わらない」

「知った風に言うな、小娘」

ケインの言う「小娘」に、またも言い知れぬ威圧感。

「同じ状況など、有り得んさ。人間自身、一秒単位で進化している。いくら過去に戻ろうと、お前の経験した事実は消えない。そのお前が干渉した未来は、以前とは必ず異なる。そして・・・」

啞えたココアシガレット、苛立つように噛み折っては続ける。

「お前の背に鹿目まどかが居る以上、一人で戦うことはできない。わかるか？ お前のやってることは、本気で戦うと言いながら両手足縛っているようなものだ」

「どういう、こと？」

言葉に衝撃、僅かに放心するが反応するほむら。

ケインが屋上から去ろう。と、ほむらとすれ違いざまに。

「手段を問わない決意、年の割には立派だ。ならまずは、その下らない意地を捨てることから始める」

「な・・・!」

自身の決意を、下らない意地と、罵られた衝撃は怒りよりも更に放心を生む。

屋上に一人、取り残されるほむら。昼空を見上げては、悔しげに。

「今更、どうしろっていの・・・」

吐き捨てる言葉は、自嘲の笑みを生んだ。

――――

夕暮れ時、放課後の見滝原中学校の校門。

まどか、さやか、仁美の談笑に混ざるほむら。

校門を超えたところで、ほむらが言う。

「ここで別れましょう。まどか、また明日」

「うん、……ほむらちゃん、気をつけてね」

まどかが力強く答える。と、さやかと仁美がからかうように。

「ありや、ふたりだけの世界ですか」

「まあ！ まどかさんと暁美さんは、その様なご関係ですよ！？」

苦笑いにまどか。ほむらがたしなめに言う。

「まどかが困ってるでしょう？ 二人とも、また学校で」

別れの挨拶。三人が手を振って、夕焼け道を歩き行く。

その背が見えなくなると、ほむらの後ろから声。

「お待たせ、暁美さん」

「巴、マミ……先輩」

ほむらの歯切れの悪い答え、マミが疑問に。

「どうかしたの？ いい顔色には見えないわ」

「大丈夫。少し、考え事を」

そう答え、ほむらの頭によぎるのは、ケインの言葉。  
自らの一人で戦う覚悟を「下らない」と一蹴するそれ。  
ほむらが校舎の囲い壁に背を預ける。と、マミが尋ねた。

「隣、いいかしら？」

「・・・ええ」

「ありがとう」

受け答えして、ほむらの隣に背を預ける。  
そのまま、言葉を。

「私、ね。実は今、嬉しいの」

ほむらは無言のまま、返事の代わりに目線を。

「ずっと、一人で魔女と戦ってきた。家に帰っても一人。学校に友達はあるけど、魔法少女のことは隠してる。・・・こんな言い方すると、酷いと思う。でも、昨日曉美さんや皆が巻き込まれた時、心のどこかで喜んだ。もう、魔法少女を秘密にする必要がないって」

夕日の空を、マミが見上げる。

「昨日、ラングロッド先生に言われた時、すごく重く感じた。私の不謹慎な喜びを覚ったんじゃないかって、思うほどに。だから、その後で先生が、皆で魔女退治に当たると言った時、最初に出会った以上に喜びを感じたの。もう一人じゃない、何も怖くないって思えるほど」

マミはほむらの手を取る。

「暁美さん、私と友達になってほしい。単なる学友としてだけじゃない、魔法少女の、友達として」

真っ直ぐな金の瞳。

純粹な感情の込められたそれに、ほむらは思わず目をそらす。握られた手の力が、脱力する。マミは不安気に。

「嫌・・・かしら？」

「違っッ！」

ほむらの必死な否定は、マミの不安を驚愕に吹き飛ばす。

「私に・・・私は、あなたにそんな事言われる資格なんて、無い」

「だが、言われた事実は変わらない」

ふと届く、男の声。

校門を通り抜けたケインが、その姿をのぞかせた。

背のライフルケースを背負い直し、ココアシガレットを啜えながら。

「お前に資格が無いのは分かった。だが、巴はお前の意志を聞いた。」

答えに資格の有無は、辻褃合わんと思うが」

言葉を浸透させるように、ほむらが悩みに考え込む。  
と、ケインが唐突に。

「ならば、こうしよう。・・・巴」

「あ、は、はい」

突然呼ばれ、しどろもどろに緊張するマミ。

「今夜、魔女退治の後に話すことがある。その話を受け入れられたら、暁美を巴の友人にさせる」

「そんな勝手に！」

ほむらの抗議も聞かず、マミを見据えるケイン。  
マミは決意に尋ねる。

「暁美さんが拒んだ理由と、関係、しているんですね？」

「それは、実際に聞けば分かる。それより、今は魔女を探すぞ」

歩き出したケイン。その背に続く、マミ、ほむら。

元々、仏頂面に無愛想のケインはさておき。マミとほむらの間には、  
息苦しい沈黙。

耐えかねてか、宣言か、ほむらが。

「マミ、先輩。私も、あなたと友達になればいいと思う」

「暁美、さん・・・？」

「だから、現実を受け止めて。ケインの話す事実は、少女には荷が重い。押しつぶされそうになったら、さっきあなたが言った気持ちを思い出して・・・乗り越えるつもりなら、私も一緒に力を貸す」

「暁美さん、あなたは・・・」

言葉を溜めて、マミが。

「あなたは、ラングロッド先生と付き合ってるの？」

「・・・は？」

素っ頓狂なほむら。

マミは照れたように、恐る恐ると尋ねる。

「だ、だって、先生を名前で・・・」

その様子に、ほむらは思わず吹き出した。

「ぷっ、ふふっ・・・勘違いもいいところよ、先輩」

笑われた羞恥心に、真っ赤なマミ。

「あうう・・・笑うことないじゃない・・・。でも、それじゃあ何で名前で？」

ほむらは冷静に、黒髪を掻き上げて。

「相棒よ」

「・・・え？」

今度はマミが、素っ頓狂な声を上げた。

――――

夕暮れ時の町外れ。

ほむらとマミが、自分のソウルジェム片手に、見合わせに頷く。  
光を放つソウルジェムに、ケインは悟っているのか尋ねる。

「見つけたのか？」

「ええ」

答えたのは、ほむら。

続けてマミが。

「あそこの廃墟が怪しそうです。行ってみましょう」

言葉に合わせて、廃墟に歩を。

入り口まで近付くと、皆の目に屋上の人影。

手すりより身を乗り出したそれは、自殺の意味を示した。

ケインが焦りに言う。

「間に合うか・・・！？」

「任せて！」

頼もしげにマミが、魔法少女の衣を纏って飛び出す。

屋上より力無く落下する女性。

マミが跳ばうと屈んだ瞬間、女性の姿が消える。

同時に、草の絨毯に着地したように現れたほむら。そして、落下していた女性。

大したこと無いと言わんばかりに、髪を掻き上げるほむら。

マミが落ち着いた驚愕に尋ねる。

「今のは、暁美さんが？ 転移系の魔法かしら」

そこにケインの声。

「巴、問答は後にしろ。他にも一般人が巻き込まれているかもしれない。慎重かつ早急に行動する」

ケインの声は、教師から軍人のものに。

手早くライフルースから、G3の小銃。銃身にサバイバルナイフを着剣し、銃剣にする。

マミが感心に言う。

「手馴れているんですね」

「銃剣を使うのは久しいがな。・・・ほむら、様子は」

廃墟の入り口から内部を覗き込むほむらが、振り返って答えた。

「結界の入り口が開いてる。昨日の傷が残ってる証拠よ、隠す力もないくらい弱ってる」

「チャンスだな。今回は確実に仕留める」

ケインの言葉。ほむら、マミと頷く。  
歩く先には、メンヘルな花丸の紋章。

魔女の結界の入り口であるそれに、ケインが迷いなく進む。  
マミが冗談っぽく。

「先をこされちゃったわね」

「足が竦むよりずっといいわ」

ほむらも冗談に返して、二人同時に結界の入り口に飛び込んだ。  
そして、魔女の結界の廃墟内。現実の面影か、夕日の差す空間。  
階段を上がりきった所で、虹色の雲のような体に蝶の羽が生えた使  
い魔。

その数は、十や二十では足りない。数を利用した使い魔が、三人を  
囲む。

そのまま背中合わせに、ケインが言う。

「実力テストだ。一分以内に殲滅する」

「ええ」「はい！」

ほむらが冷静に変わらず。マミが頼もしげに力強く。

それぞれ答え、一斉に攻めかかる。

初めにマミ。

手のひらで宙を薙ぐと、幾つものマスケット銃が現る。

手近な使い魔に撃つては、マスケット銃を捨て、繰り返す。しかし、  
ダンスのようなステップと曲芸のような銃捌きには、攻撃の単調さ  
も隙も感じさせない。

ほむらは、使い魔の群れに転移のような移動を何度も。

本人は特に攻撃の気配を見せない。しかし、彼女の現れた所から、突然の爆発。

一度や二度ではないそれは、短時間で多くの使い魔を屠る。ケインは、あくまで人間の戦い。

しかし、銃剣から放つ銃弾の狙いは、正確に。薙ぎ払う銃剣の刃は、的確に。

派手な攻撃こそ無いが、無駄なく確実に使い魔を減らす。最後の一体とばかりに、ケインが使い魔を銃剣で突き貫く。消え去る使い魔の体も意に介さず、ケインが仏頂面に言う。

「一分二秒。俺も鈍ったな」

「たかが二秒でしょう？」

挟む言葉にほむら。

「二秒あれば、拳銃なら二発。小銃なら三発撃てる」

「付き合ってられないわね」

ほむらが呆れに言う。

と、マミが仕切り直しに。

「この先、魔女の気配があるわね」

トンネル状の通路を指さす。

歩き進む先、ケインとほむらには見覚えのある魔女。そして、庭園のような芝生の結界。

中央に存在を構える魔女。四足動物の腹部に当たる部分は、大きく抉れに無くなっていた。

と、ケインがほむらとマミに。

「魔女の側面から、二人で翻弄。その隙に、一人が止めを刺す」

「止め役には、マミ先輩がいいわ。彼女の大砲なら、威力は充分よ」

ほむらの変わらぬ声色。

マミが、少し驚いたように。

「あら？ 暁美さんに見せたことあつたかしら？」

「それは・・・」

そこに、ケインが割ってはいる。

「決まったなら行くぞ。俺とほむらで、左右側面から牽制する」

銃剣の弾倉を、新しいものに取り替えて言う。

「3、2、1、go！」

ケインの合図に、駆け出す。

ほむらは、魔女の右側から89式の小銃を。

ケインは、左側から銃剣を砲火する。

体の肉を大きく失っている魔女。

満足に動けず、悪あがきに蔦を伸ばす。

だが、弱っているのか、先日 of 精度も無く数も少ない。

ほむらは軽やかなステップで避けきる。

ケインは向かってくる蔦を、銃剣を振るっては切り捨てた。

そのまま目配せ、先にはマミ。

一つに頷き、跳躍。魔女の上空、マミがマスカット銃を一挺。  
と、マスカット銃を回るように黄色のリボン。瞬く間に、大砲のよ  
うなマスカット銃に。

巨大な銃口の先には、魔女が。  
マミが気迫の一声に。

「ティロ・ファイナーレッツ！」

強力無比の弾丸。

圧倒的な破壊力をもって、魔女を跡形もなく消し飛ばす。

そこに、綺麗な着地を見せるマミ。

いつの間にか、手には紅茶のカップが。

「一息に一杯、いかが？」

「一息には、緑茶と決めているの」

ほむらが言う。と、今度はケインに。

「ラングロッド先生は、どうです？」

「間に合ってるさ」

ココアシガレットを一本啜えた口で、そう言った。

――

夜暗に虹色のライトアップを施す、見滝原の噴水広場。

ベンチに座るマミが、ほむらに。マミの手には、グリーンフィード。

「でも、いいの？ 私が貰っちゃって」

「ええ、私は大して魔力を消費していないもの」

「そう？ でも、以外ね。銃器を使う魔法少女なんて初めてだわ」

「それは、あなたが・・・」

言いかけて、やめる。

マミが首を傾げるが、ケインがココアシガレットを啜えたままに言う。

「さて、そろそろ覚悟を決めてもらおうか」

言葉は、マミだけでなく、ほむらにも。  
固唾を呑む雰囲気。ケインは仏頂面に。

「では、話そうか。魔法少女の真実をな」

――――

【魔女狩り】に記録された魔法少女を、そのままに話す。

押し黙るほむら。言い終えたケイン。二人をよそに、マミが放心に。

「そん、な・・・それじゃあ、私たち・・・」

力なく、立ち上がっては変身。魔法少女のそれ。

ほむらが気がついたかのように、同じく変身して言う。

「ケイン！ 下がちなさい！ 彼女はもう・・・」 「黙っているッ

！」

軍人が叱咤するような声。

震え上がるような声に、ほむらは言葉をなくす。それが、ほむらの隙となる。

マミの手、突然に現るマスケット銃。同時に、ケインが懷に手を。

マミはほむらに銃口を向けようと、そこに割り込むケインが銃口をマミに。

回転拳銃とマスケット銃を、互いに突き付ける。

「邪魔をしないでッ！」

「向ける相手を間違ってないか？」

マミが叫びに、ケインが仏頂面に言う。

「みんな・・・魔法少女はみんな！ 死ぬしかないじゃない！」

錯乱のままに、叫ぶそれ。

だが、ケインは微塵も表情を変えず。むしろ、呆れたように。

「人間など、鉛玉一発で簡単に死ぬ。だから、死なぬ為に避ける、防弾チョッキを着る、生きる為の工夫をこなす。魔法少女だろうと、死なぬための工夫はこなせる筈だが？」

「あなたには分からないわよ！ 人間は絶望しても死ぬことはないわ。けど！ 魔法少女は絶望できないのよ！ 人間のあなたには分からないわよ！ 私たちゾンビの気持ちなんて！」

「まるで駄々っ子だな」

「それしか・・・魔法少女しか選べなかったのよ！ 契約しなければ死んでいた！ でも、死にたくなかった！ 選ぶ余地なんて無かったのに・・・なんで、こうなるの、よぉ・・・」

ケインの皮肉も通じず、マミは目から涙を。  
今度は溜め息一つにケインが。

「バマミ。お前、真っ当に生活できているか？」

聞いているのか、マミからは涙の嗚咽。

「まあ、学校に行っているならできているんだろう。しかしだ、確かに選択の余地があれば、それに越したことはない」

懐かしみと自嘲の混ざった、ケインの顔。

マミも、銃こそ降ろさぬが、ケインの声が耳に入り始めた。

「俺は貧民街の生まれ、それも治安まで最悪な場所だ。強盗殺人なんて当たり前。毎日転がる死体は、生ゴミと一緒に燃やす。誰が親父が分からない子は、産んでは捨てる街だ」

驚愕の表情にマミ。ほむらも冷静を見せるが、驚きを隠し切れない。  
ケインは事実とばかりに淡々と続ける。

「そこで学んだことが、一つある。嘆くことと何もしないことは同じだ。バマミ、お前はどっしたい？」

「え・・・？」

突然の間に、素っ頓狂なマミ。

「魔法少女が死ぬしか無い。しかし、人間もいつか死ぬ。それこそ、歩道を踏み外して車に轢かれてもな。・・・お前は、生きたいか？死にたいか？ シンプルに考えろ」

「私は・・・死にたくない・・・！ 生きて、いたいよぉ・・・！」

向けられたマスケット銃が、涙と共に震える。

ケインは呆れに溜め息一つ。回転拳銃の銃身で、マスケット銃を軽く叩く。

「だったら、こんなことをするべきではないと思うが？」

一言に、完全に殺意を損失するマミ。

解けた変身に、マスケット銃も消え去り、足を折り崩す。

ケインも回転拳銃を懐に。と、その脇を、変身を解いたほむらが通りすぎる。

マミへ屈んでは、平手打ち。その痛みが、現実連れ戻す。

「曉美、さん？」

「夕方、私の言ったことを忘れたの？・・・受け止めてくれるのなら、私が支える。それが何？ 案の定、あなたは錯乱した」

返す言葉も無いマミが、うなだれる。と、ほむらが手を差し出して。

「・・・もう、見失わないで」

「あ、うぁ・・・」

ほむらの胸に、マミが飛び込むように顔を埋める。  
夜の噴水広場に、嗚咽の声だけが響いた。

**事ノ五：人間は鉛玉一発で死ぬ（後書き）**

よかつたら感想とください。

良悪評価も総じて、モチベーションになるので。

タイトル変えました

事ノ六：ボクと密談して、ケインを暗殺してよ

場所は変わらず、深夜に近付く噴水の広場。

ベンチに並んで座る、ほむら、マミ。街灯を背、腕組みにもたれるケイン。

無言の空気に、マミがポツリと。

「ごめんなさい。暁美さん、ラングロッド先生」

「マミ先輩が落ち着けば、何よりよ」

そう言ったほむらの顔は、本当に嬉しそうな感情。マミもつられて微笑んでしまう。

と、そこにココアシガレットの噛み砕く音。

わざとらしく響かせた本人が、音に振り向いた二人に、否、ほむらに言う。

「さて、賭けは俺の勝ちだ。それでいいな？ 暁美ほむら」

ほむらの顔が、一瞬だけ強ばる。

そして、対抗するように。

「マミ先輩に現実を見せた手腕は見事ね。だけど、その後の功績は私のものよ」

「俺のオッズは命。命を失っていない時点で、俺の勝ちは事実だろう?。」

言い返すケインは、対抗と言うよりも、楽しむようなそれ。

「あの時、銃口を向けられたのは私。賭け自体が無効よ」

「何で俺がわざわざ、割って入ったと思ってるんだ？」

「私は臨戦態勢だった。何時でも避けられる状況だったわ」

「流れ弾は？ 人間の俺が、魔法少女の戦いに巻き込まれて無事なわけ無いだろう？」

「【魔女狩り】が何を言ってるのかしら？」

「元【魔女狩り】だ。今は歯牙無い一教師だ」

「日本の教師は、銃器を所持しない」

「俺の生まれ国では、一般人の銃器所持は当たり前だ」

「ここは日本よ。郷に入れば郷に従いなさい」

「疑わしきは罰せず。従わない部分が露見しなければいい。そうだろう？ 銃泥棒」

「くっ！ ああ言えばこう言うっ！」

「銃泥棒」が泣き所だったのか、苛立ちに耐え切れなかったほむらが叫ぶ。

と、ケインが勝ち誇りに。

「まだまだ小娘だな、相棒」

「勝手に言ってなさい」

ほむらがふてくされ、髪を掻き上げると、今度はマミが疑問に。

「えっと、どういうこと？」

――――

ケインの目的、ほむらの予想、二人の賭け。  
ケインから聞き終えたマミが、またも疑問に。

「先生が戦おうとしている魔女が、とても危険なものだというのは分かりました。私も、先生のお手伝いが出来ればいいんですけど・  
・でも、一つ」

マミが向く先、隣のほむら。

「暁美さん。あなたは一体、何者なの？」

「それは・・・」

迷いに口ごもる、ほむら。

そこに、ケインが仏頂面に励ます言葉。

「思う通りに言ってやれ、相棒<sup>ほむら</sup>。フォローは俺<sup>ほむら</sup>がしてやる」

「そう、ね。一応、期待しておきましょうか」

心強く、ほむらが答え。そして、マミに言い始めた。

――――

「時間、逆行？」

マミが素っ頓狂な反応で。

だが、ケインが隙かさずに言う。

「信じる要素はある筈だ。巴の錯乱を予測、魔法少女としての戦闘スタイルを知り得ていた。魔法少女の特殊能力は、願いに大きく関係する。夕方、女性を助けたのは時間停止の力だろうな」

と、マミが慌てて。

「いえ、違うんです。暁美さんのことは信じてます。ただ、気になっただけ・・・あ」

失言という反応。

しかし、ほむらがふと言い始める。

「私が魔法少女になる前、鹿目まどかと巴マミ、二人はワルプルギスの夜と戦って死んだ」

「え・・・？」

「横たわるまどかの体を抱きかかえて、私はこう願った。【彼女を守る私になりたい】。馬鹿よね、死んでから守るなんて」

一つ自嘲に、続ける。

「だけど、私の願いはかなった。私は魔法少女として、ワルプルギスの夜が来るひと月前に帰ることが出来た。・・・私の願いは、ここまでよ」

「暁美さん、その、不注意だったわ。・・・ごめんなさい」

申し訳なさそうにマミ。しかし、ほむらは特に気にも留めず。

「気にしないでいいわ。誰かには話した所で、決意が鈍るわけじゃないもの」

「・・・羨ましいわ。暁美さん、強いよね」

「ほむら」

「え？」

「ほむらでいいわ・・・マミ先輩」

冷静だが笑みに言う。対して、マミは少し戸惑いながらも、嬉しそうに。

「えっと、じゃあ、ほむらさん？」

「ええ、何かしら？」

「鹿目さんを守ろうというのはわかったけど、魔法少女の話題をした時、ほむらさんすごく反対したでしょ？何か理由があるのかと

思って」

ほむらはわずかに考えて。

「ええ、そうね。まどかのことも・・・キュウベえのことも、まともて話すわ」

「なら、後は頼む」

言ったのはケイン。

立ち去ろうとする背を、ほむらが呼び止める。

「どこへ行く気？」

「魔法少女なら、暴漢程度苦にならないだろう？　それと、明日の1240。校舎の屋上に来い。以上だ」

「だから、どこに行くつもり・・・。ちょ、ケイン！」

勝手に言い放ち、ケインは夜暗に去って消えた。

――――

見滝原警察署。

夜に静まり返った資料室。

ペンライト片手に、ケインが資料を物色する。

ジャンルは、見滝原で起こった交通事故と自殺、心中関連の物。素早くページをめくる目は、原因不明の文字を見つけては選別すると、部屋に近づく足音が耳に。

ケインはペンライトを消し、暗闇に身を潜める。

そして、署内巡回の警察官が資料室に入る。

「おい、誰か居るのか？」

警官の声に、答えたのは暗闇の静寂。

そのまま、手のライトが資料室を照らす。

「おかしいな、確かに物音が・・・」

警官の視線が、窓に向いた一瞬。

ケインが飛び出し、懐に潜り込む。

そして、鳩尾に拳を一撃。警官は気付く間もなく気絶。やや焦ったようにケインが。

「長居はよくないか・・・」

選別した資料をまとめては、窓からロープ伝いに飛び降りる。

降り立った駐車場には、人影なし。

ケインはそのまま、外壁を飛び越える。

その後、見滝原の夜に警察署の警報が鳴り響いた。

――――

遠くまで響く、けたたましい警報。

見滝原の夜の街。ビルの屋上から、街中を見下ろす人影一つ。

雪のように白い髪。純白の法衣に近いドレスに、神官を思わせる帽子。

大人に近い顔立ちと雰囲気。マミとは違い、冷徹ささえ感じる瞳の少女。

目下の街に、呟く。

「今日の夜は、煩わしいわね」

夜空の三日月を一瞥に、少女は背後に話しかける。

「私に用かしら？ キュウベえ」

どこか冷ややかな声。

キュウベえは意も介さずに。

「朗報だよ、美国織莉子。とても素質のある魔法少女を見つけた。鹿目まどかって言うんだけどね」

「鹿目まどか」という名前に、織莉子が驚きに振り返った。そして、殺気に満ちた声で。

「・・・どうやって知った？」

「まるで知られて欲しくない言いようだね、織莉子。でも、話はこれだけじゃないんだ」

織莉子の睨みにも怯まず、いつも通りの人懐っこい声色のキュウベえ。

「キミの目的はわかったよ。鹿目まどかから、ボクを遠ざけようとしたんだろう？」

「そう、なら今からあなた達インキュベーターは敵・・・」「そこで、ボクから提案があるんだ」

織莉子の敵意を、キュウベえが遮りに続ける。

「キミの能力はわかってる。大方、鹿目まどかが魔法少女となった未来を【視た】んだろう？」

「今更、隠しても無駄と言いたいのかしら？　でしたら、慣れ合う必要もあつて？」

「キミのことだ。どうにかまどかを殺そうとしたんじゃないかな？　そうでなかったら、別の素質ある少女に注意を向けさせたりしないだろう？」

「話は終わり？」

織莉子の周囲に、小さな水晶玉が幾つも浮かぶ。

青く透き通る水晶は、魔法少女の武器としての役割を秘める。だが、キュウベえは話を止めない。

「安心してよ。鹿目まどかは契約から遠ざかった。一人の男によつてね。でもこの男というのが厄介で、人間なのに魔法少女を認知して、魔女退治まで行う。しかも、恐らくは鹿目まどかを守る人間。つまり、キミにとっても厄介な存在だ」

「ここまででは前置きでしょう？　本題を言いなさい」

織莉子の敵意が、僅かに薄れる。

「ボクは鹿目まどかの情報をキミに提供する。キミには、厄介な男・  
・ケイン＝ラングロッドを始末して欲しい」

そう言ったキュウベえの顔は、殺害依頼とは思えぬほどの笑顔だった。

事ノ六：ボクと密談して、ケインを暗殺してよ（後書き）

マミさんに関しては落ち着いたので、次は織莉子です。

ちなみにキリカはまだ魔法少女になってません。

文面からお察しでしょうが、杏子はゆまと行動しています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4190y/>

---

魔女狩りの弾丸

2011年11月20日16時40分発行